

元旦の試筆

以前遠い親戚で大叔父の代の人がいて、彼は孝廉公で『太上感應篇』を奉持した人で、毎年年末になるといつも一枚黄紙の上奏文を書いて、焼いて玉皇大帝に呈し、彼が年内にどれだけの善行を積んだかを報告し、“地仙”の欠員補充の資格を買うために登記してもらい便宜とした。いまは民国十三年もすでに過ぎ、今日は元旦で、家に迎えてともに“屠蘇”を飲んだ友達も去った後、狼毫の筆を執って書き初めをしようとした。去年の生活を回想してどんな事が記録するに値するか、あれこれ考えてみたが結局何もない。ただ次のちょっとした感想だけが過去の経験の結果ということになるだろうか。書き留めてわたしの“上奏”の材料としよう。

古人は“四十にして惑わず”と言った。これは古人が道を学んで得る所があったということである。われわれはそうはいかない。わたし個人について言えば、三十にして立ち、（これは何かの主張を立ち上げることである。）四十にして惑い、五十にして学に志すといった所だろう。以前わたしはまだ自分には“自分の畑”があると思っていた。が去年あたり少し疑わしくなり、今では明々白白そんな畑などないことがわかった。わたしは当初たぶん人の畑を借りて少しばかりの痩せた大根や苦菜を作り、いい加減にごまかしてきただけなのだ。ところが“いま現在”になってみて突如として自分がもともと“遊民”であって、肩に一丁鍬を担いだけで、農繁期には雑用をする以外は、実は何もやれる仕事がないということに気がついたのだ。自分の畑を失くしたのは何の惜しいこともない。もし、世間の良い習慣が規定するように、ゴロツキと同じように気楽に日を過ごすことができるならば。ただどうしても少しの無聊は免れないだろう。だからよくよく二三年考えれば、あるいはまた発憤して開墾し、二畝ばかりの田畑を拓くかもしれない。目下はやはり真面目に素人を自認し、“文学者”の看板はしまうことにしよう。

わたしの思想は今年になって又民族主義に戻った。当初は錢玄同先生と同じく、最も早くは尊王攘夷の思想であって、拳匪が決起した時に田舎で一人の“洋口子”が“破脚骨”に銅盆帽どうのヘルメットを打ち落とされたと聞いて、甚だ愉快で、日記に書き込んだ。後になって『新民叢報』『民報』『革命軍』『新広東』の類を読んで、一変して排満（および復古）となり、民族主義を堅持すること十年の長きに及んだが、民国元年になってようやく軟化した。五四の時代わたしはまさに世界主義を夢見ている、多くの迂遠な話をしたが、去年の春に範囲を縮小して、改めてアジア主義とした。清室が廃号退出するに及んで、遺老や遺少及び日英帝国の浪人が風浪を起して、詭計陰謀は今になっても已まない。わたしはそこで又自分の迂闊さを悟り、民国の基礎がまだ固まっていない、現在は実事求是でなければならず、民族主義からやるのがよからうと思った。わたしはかの宗教的愛国者たちが提唱するように、国家だから愛すべきだとは信じない。だが個人の生存のために民族主義を主張するのは正当であり、しかももっと“高尚な”別の主義*とも衝突しない。だがこれは個人の傾向に過ぎず、決して青年に宣伝しようとは思わない。民族革命思想の浸潤を受け、そして光復と復辟の時の恐怖の圧迫を経験したことがない者は、我々のこうした心情について大抵は理解できないか、あるいはあまりにも古臭くあまりにも非紳士的な態度だと思ふかもしれない。だがそれらはいずれも何の関係もない。わたしはただわたしの思想

の反動を表明するだけである。それが過激であろうが頑固であろうが関係なく。ただひとがわたしのことを世界主義の人などとおべんちゃらを言わないように願うだけである。

ことわざに、“元旦に紅紙に書けば、万事うまく行く”と云う。理屈としては何かめでたい言葉や滑稽な言葉を言うべきで、それでこそ元旦の試筆という名に適うわけだ。しかしどうしても何も出て来ず、ただありのままにいくらか言いたいことを書いたままで、その他のことはまた後で補うしかない。民国十四年一月。

※初出：1925年1月12日『語絲』第9期

* 「もっと“高尚な”別の主義」 未詳。